

# 「信越トレイル」整備をめぐる合意形成の成立過程とその課題

山崎陽介・土屋俊幸（東農工大院）

## 1. はじめに

近年、森林レクリエーションの一形態として「歩くこと」が見直され、ロングトレイル（長距離歩道）の整備が各地で行われている。その一例として「信越トレイル（以下、ST）」が長野県と新潟県との県境に位置する関田山脈において整備されている。この特徴として、NPO 法人信越トレイルクラブ（以下、STC）が中心となり、周辺市町村・観光協会、国有林、地元住民等多様な関係者が参加して連携・協力体制を作り上げようとしている点が挙げられる。この過程には数多くの関係者が関わっており、各主体間での合意形成が不可欠であると言える。

そこで本報告では、ST 構想が生まれてから現在に至るまでに関係各主体がどのように利害関係を調整して合意形成を行ってきたのか、その成立過程を3段階に分けて明らかにし、分析する。それにより、合意形成過程の問題点と今後の課題を抽出することを目的とする。

## 2. 合意形成の過程

信越エキゾチック・トレッキング委員会（2000年～2003年）

旧建設省の地域連携事業に基づき設立。メンバーは地元の有識者が中心。当時の飯山市長 K 氏、ネイチャーライターの N 氏、(財)飯山振興公社支配人の H 氏らが主導し、大規模整備を伴わない ST 構想を提案。それに対する目立った反対は無く、スムーズに事業概要が決められた。

関田山脈歩くルート設置推進連絡会（2001年～2003年）

前述の K 氏が発起人となり設立。委員会の下部組織としての位置付けで、メンバーは地元の行政関係者や民間団体等。会では事務局を担当した H 氏らが中心となり、実際に整備を実施する際の負担金等の諸事項の検討や、メンバー間での意識統一等が試みられたが、その中で各地域の ST に対する態度の温度差が浮き彫りとなった。説明・議論の実施によりある程度の改善は図られたものの十分な合意には至らず、STC の議論へ先送りされるかたちとなった。

STC（2003年～）

前述の2会が統合するかたちで設立。会長に K 氏、役員に N 氏・H 氏等。両会の活動の流れを汲んで、関係者間の意識差の改善への取り組みやより広い関係者の取り込み等を、引き続き事務局を担当する H 氏らが中心となって行っている。また、2004年には北信・上越の両森林管理署と STC との間で ST 整備に関わる協定を締結している。

## 3. まとめ

これまでの活動の成果として、STC を中心とした関係者間のネットワークが徐々に形成されつつある点が挙げられる。一方でこれまでの問題点として前述の地域による意識差の存在、行政を除く関係者の関わりが薄い点等が挙げられ、STC がそれらの課題に向けて取り組んでいる。

また、整備を継続的に進めていくための担い手として、都市部からの安定的なボランティアの確保と同時に、地元住民レベルにおけるより一層の協力体制の確立が今後の課題である。

（連絡先：山崎陽介 yzaki@cc.tuat.ac.jp）